

# 「荻窪の記憶」

## こぼればなし

# 新緑に寄せて

「林はじつに今の武蔵野の特色といってよい。すなわち木はおもに楓（なら）の類で冬はことごとく落葉し、春は滴るばかりの新緑萌え出する」（国木田独歩『武蔵野』）

ここで、独歩が「今の」と断っているのは、中世までの武蔵野は果てしなくつづくスキやオギの原だったからです。その武蔵野が「林」を「特色」とするようになったのは、江戸時代に入り、農地としての開発がはじまってからのことでした。

武蔵野台地に入植した人々は、火山灰に覆われた不毛な土壌を改良するため、クヌギやコナラなどの落葉樹を植えて林を育て、その落ち葉を集めて堆肥をつくり、繰り返し畑に撒いて肥沃な土をつくりあげてきたのです。そのため、武蔵野の開拓は「木を植える開拓」とも呼ばれ、畑に必要な量の落ち葉を得るには同面積の雑木林が必要とのことから、「一反の畑に一反のヤマ（雑木林）」という言葉も生まれました。

写真②は、その林ですが、どの木も株立ちで幹が細いのは、木が一定の大きさに成長すると、薪や炭にするため伐採し、その切り株から生える芽を再び育てることを繰り返してきたからです。江戸のエネルギー需要にも応える、こうした林は、かつて武蔵野のどこでも見られましたが、薪炭の需要がなくなると姿を消してきました。

写真③は昭和初期のものですが、大木に成長したクヌギが、夏には涼しい木陰をつくる並木になっています。こうして武蔵野に暮らす人々は、さまざまな形で木を植え、その恩恵を受けてきたのです。

ところで、いま東京では、大量の伐採を伴う神宮外苑の再開発が問題になる一方、超高層化を推進するデベロッパーが「緑に包まれ、人と人をつなぐ広場のような街（麻布台ヒルズ）」などと、ビルの谷間に木を植え、緑との共生を唱えています。かつて、武蔵野の開拓は「木を植える開拓」と呼ばれましたが、

果たしてそれらは「木を植える街づくり」となるでしょうか。

いずれにしても、武蔵野の名残りの木々たちは、今年も「滴るばかりの新緑」を届けてくれることでしょう。



写真① 新緑のクヌギ  
(井の頭公園)



写真② クヌギ林  
(島田謹介『武蔵野』より)



写真③ クヌギの並木(『武州多摩郡上荻久保風景変遷誌』より)